2016．9．25
No.197

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

2016．野幌から秋だより

９月、天高く馬肥ゆる秋（野幌の空）

今年の夏は格別に暑い夏でした。

台風の被害で岩手県の介護施設の高齢者が多数犠牲になったり、道東地区では豪雨で農作物が壊滅状態になったり、道路が寸断されたりと、災害は、いつ誰に降りかかるか予測できないことを思い知らされました。心よりお見舞い申し上げます。

泊原発の避難計画は、とても確かなものとは思えません。冬の避難は困難を極めると思います。再稼働の動きが加速していますが、福島の事故の教訓を忘れてはならないと思います。

話題の映画「シン・ゴジラ」を観ました。ゴジラを新たな脅威の存在として人類と対峙させています。３・１１以降の日本は、どう核と向き合うのかを問います。ゴジラをめぐり、防衛組織が武力行使か人命尊重かの決断を迫られる展開にハラハラしながら、今まさに日本の状況ではないかと思いました。

映画では、政治的にまともな議論をして民主主義の手続きがなされています。政治家らが、核を使用してはならないと必死に解決方法を探す姿に未来への希望を感じました。

安保法制が成立してちょうど１年。議論を尽くさず、強行採決で押し切ったことは許せません。政治家のみなさんも「シン・ゴジラ」をご覧になってはいかがでしょうか？

私の夏は植村隆さんの裁判を支える市民の会の活動に明け暮れました。九州スピーキングツアーに参加したのです。その詳細はｐ２～３をご覧ください。

「知里幸恵・銀のしずく記念館」館長の横山むつみさんが9月20日に亡くなりました。68歳でした。

「銀のしずく記念館」を設立しようと2002年より始まった募金活動によって、のべ2500人以上の方々の思いが集まり、2010年9月19日、記念館が開館しました。私もささやかな協力しかできませんでしたが、アイヌ文化を語る講演会に毎年のように出かけたことや、知里幸恵さんのゆかりの地を歩いたことを思い出します。そこにはいつも、むつみさんの笑顔がありました。

23日に開かれた「銀のしずく記念館」でのお別れの会に、私も参列しました。病気が分かってから5年。延命治療はされなかったそうです。むつみさんらしい生き方を全うされました。

小さな会場に130人が集い、むつみさんを静かに偲ぶ温かい会になりました。北海道大学の北原次郎太さんによるアイヌ式のお別れの儀式も執り行われ、北原さんが作られたアイヌ民族の墓標が棺に入れられました。祭壇の横には、むつみさんご自身が縫った衣装が飾られました。後ろには知里幸恵の像が見守っていました。友人と連名で、大げさにならないお花を贈りましたが、遺影のすぐそばにあり嬉しかったです。

記念館設立に力を尽くした小野有五さんの最後の挨拶も心にしみました。

野幌森林公園のマユミ

スピーキングツアーが全国に支援の輪を広げました
植村隆さん応援　九州講演に同行して

「私は捏造記者ではない。歴史修正主義勢力の標的にされてバッシングされた」と訴え続けている元朝日新聞記者、植村隆さん（現在韓国カトリック大学客員教授）が８月９日の旭川から９月１１日の北九州まで約１ヶ月間、道内外を駆け回りました。

9.8 被災した熊本城

私は「植村裁判を支える市民の会」から応援で、九州スピーキングツアーの２日目、9月８日の熊本から参加しました。

九州４市での講演会

9月７日から11日まで、福岡、熊本、水俣、北九州の４市で開催された植村隆さんのスピーキングツアー（講演会）の模様を、新聞記事からの引用と熊本から参加の私の記録と写真でお伝えします。（福岡の写真はM.Iさん提供）

■9月７日（水）福岡市、西南学院大学博物館２階講堂

朝日新聞（西部本社版９月１４日朝刊）より以下に引用

「私には事実という武器」　元朝日記者・植村さん講演

従軍慰安婦問題を報じ、「捏造（ねつぞう）」とバッシングを受けた元朝日新聞記者の植村隆さん（５８）が福岡市で講演した。

「捏造などしていない」と強調。批判的なメディアからの取材も受けたが、ひるまなかったのは「私には事実という武器があったから」と明かした。

講演は「慰安婦」問題と取り組む九州キリスト者の会が７日に開いた。

植村さんは、「慰安婦を強制連行したように書いたのが捏造だ」などと批判されている。これに対し、「強制連行」とは書いていないとした上で「強制だったか、だまされたか、人身売買だったかで罪が軽くなるわけではない。世界は、連行の経緯ではなく、戦場でどのようなひどいことをしたかその事実について問題視している。『強制連行がなかったから、日本は謝罪する必要はない』という論理は通用しない」と指摘した。

慰安婦問題をめぐる米国の歴史研究者らの声明を引用し、「過去の過ちを認めるプロセスは民主主義社会を強化し、国と国のあいだの協力関係を養う」と訴えた。

植村さんは１９９１年に書いた記事が「捏造」とされ、新聞社退社後に勤務していた大学や家族にまで脅迫や嫌がらせが相次いだ。

朝日新聞は２０１４年８月の検証記事で、「慰安婦」と「女子挺身隊」を誤用したことを認めた上で「意図的な事実のねじ曲げはない」と結論づけた。同年１２月の第三者委員会報告も捏造を否定している。（佐々木亮）

■９月８日（木）熊本市、くまもと県民交流館パレア

熊本の講演会は札幌訴訟弁護団事務局長の小野寺信勝弁護士の前任地ということもあって実現しました。熊本市内のたくさんの弁護士さんの準備と協力があり、１００人の参加がありました。 講演会のPRのために3300枚もチラシを新聞折り込みをしてくださいました。

始めの挨拶は小野寺さんの友人弁護士、終わりの挨拶は元の事務所代表がされました。

「ジャーナリスト全体が萎縮してきているのを感じる」「民主主義を守る運動を熊本でも頑張りたい」などの感想が寄せられ、その盛り上がりと熱気に、はるばる札幌から応援にかけつけた「支える会」のスタッフ３人は驚き、植村さんを支援する声が広がっていることを、あらためて実感しました。

9日は水俣です。水俣駅の正面は巨大なＪＮＣ（旧チッソ）。（写真左）今も経済の中心であり続けています。

■９月９日（金）水俣市、水俣市公民館

水俣市での講演会は水俣病の支援グループや、川内原発に反対している方たち、人権問題に関心のある方など、50人の参加がありました。

植村さんは、25年間前に書いた慰安婦問題の記事で、突如バッシングを受けるようになった経緯を話し、様々な映像を使って、「自分の問題だけでなく、言論の自由と報道の自由を守る、戦後70年間守り続けてきた民主主義に対する攻撃に屈しない」と力強く決意をこめて、講演を結びました。

水俣病も差別と偏見の中で闘ってきた歴史があります。患者さん、支援者から共感の拍手が送られました。

■9月11日（日）北九州市、若松バプテスト教会
九州スピーキングツアーの最終日。主催したのは　小田山墓地・朝鮮人遭難犠牲者追悼集会実行委員会です。
福岡・朝鮮歌舞団の「トラジの花」などの舞踊と歌の披露（写真）のあと講演が始まりました。
植村さんは最初に、「ニュース２３」の映像と

アンカーの岸井成格さんのコメントを紹介。「植村バッシングはまさに歴史修正主義者らによる攻撃だった」と語り、２０１４年のバッシングは異常だったと振り返りました。
そして、「さまざまなバッシングに怯まなかったのは、私には事実という武器があるからです」と語り、「慰安婦を強制連行したように書いたとして、捏造と批判されたが、そのように表現してはいない」「世界は強制連行か、だまされたかを問題にしているわけではない。意に反して慰安婦にされたこと。戦場で性的に蹂躙されたことは事実であり、彼女たちの尊厳を踏みにじったことにきちんと謝罪する必要がある」と訴えました。
植村さんの真剣に訴える姿に、会場は共感する

人たちの熱気があふれていました。
講演の後、参加者は２７回目になる小田山墓地での朝鮮人遭難犠牲者追悼集会に参列し犠牲者を偲び、献花しました。

交流会は若松浜ノ町教会に会場を移し開かれ、２５人が参加。それぞれの活動や植村さんへの励ましで宴はいつまでも続きました。
主催した実行委員会には在日人権問題（こどもの人権問題を含む）、外国人登録法、憲法９条、様々な活動 に牧師 をはじめ教会員、市民が参加しています。
福岡市では、平和集会などで会場を貸さないという動きも出ているそうです。そういう中で植村さんの講演会が各地で成功した陰には、主催してくださった、さまざまな市民運動の仲間たちの尽力があったことに感謝しています。
４日間の講演で「真実」 ９０冊、金曜日160冊を完売しました。

水俣病を知る旅

9月9日、熊本から講演会会場、水俣へは在来線で八代で下車。オレンジ鉄道に乗り換え、美しい海岸線の景色を楽しみました。写真は左から植村隆さん、中島圭子さん（「水俣」を伝えるネット）、七尾寿子さん（支える会事務局長）、私です。

講演のない10日、私たち３人はレンタカーを借り、水俣病を知る旅をしました。
胎児生水俣病で亡くなった、上村智子さんの「乙女塚」（写真左と下）や水俣病センター相思社、水俣病資料館、美しい不知火海などなど。

水俣病は解決したと思われていますが今も2100人もの方が患者認定を求めています。
水俣病資料館で語り部をされている緒方正実さん（中央写真）にもお目にかかりました。短い時間でしたが「札幌・水俣展」の頃は、いろんなことがあって、水俣病に向かう自分の気持ちの転機の時期だったと話されました。緒方さんの語りを次回には是非お聴きしたいと思いました。

「水俣病原点の地」とも言われる百間排水口（写真・上）にも行きました。ここからメチル水銀が流れ出ていたのです。普通の暮らしがあった街で垂れ流しされていたことに怒りを覚えました。

穏やかで美しい不知火海

東北・北海道集会（秋田）に参加して

7月30、31 日に秋田県で開催された日本山岳会の行事、東北・北海道集会に参加しました。30日、秋田空港には秋田支部の福田光子さんと長岡幸則さんが車で迎えに来てくださり、札幌から参加の西山支部長と、会場の国民宿舎・森吉山荘に向かいました。空港から150㌔もあり、秋田の田園風景やブナの森などを楽しみながら、ようやく到着。15支部87 人の参加で、普段は静かな森吉山荘が大賑わいでした。

この日は、北秋田市芸術文化功労章を受章されている戸嶋喬さんによる「森の恵（めぐみ）・山の生活（くらし）」と題した講演がありました。戸嶋さんは、森吉山は別名「秋田山」として親しまれてきたこと、裾野の広い山麓山腹がブナの原生林に覆われていたために、木材産業や鉱山、マタギ文化を育んできたことを、スライドを使って説明しました。マタギ文化のお話で、クマを狩猟し解体して胆のうや骨などを薬用にしたことや、獲物は平等に分配したことなどは、北海道のアイヌ文化との共通性があり、興味深く聞きました。

集会で挨拶する今野秋田支部長

その後、山荘前で、秋田の指定無形民族文化財の阿仁前田獅子踊りを鑑賞しました。獅子踊りは雄獅子、中獅子、雌獅子で舞います。三者の恋の葛藤を表現したものだそうです。途中で突然の雷雨に見舞われ、ずぶ濡れになりながらも最後まで踊り、山の安全祈願をしました。

阿仁前田獅子踊りを鑑賞

森吉山の頂上にて　写真・鎌田倫夫さん

夜の懇親会は、あちこちのテーブルで交流の輪ができ、楽しかったです。秋田支部で料理したクマの肉が入った大鍋が用意され、私も恐る恐るいただきましたが、油が乗って美味しかったです。

31 日は森吉山登山。雨が心配でしたが、晴れ。ゴンドラを使って、9 時10分1167㍍から登り始めました。暑いのと、人数が多い（秋田支部のサポートも含めて70 人）ので、楽なコースです。登り2 時間、下り1時間ですが、途中の石森から山頂が見えて、登山道の花を楽しみながら歩を進めました。多くの花が終わっていましたが、高度が上がると、涼しい風が気持ちよかったです。

そんなに高い山ではありませんが、今年の春には、天候の悪化で道が判らなくなって遭難者も出ているそうです。冬は樹氷のモンスターが美しい山だと説明がありました。ニッコウキスゲはすでに終わって、一輪だけ咲いていました。イワイチョウ、キンコウカ、ハクサンフウロ、タチギボウシ、クルマユリ、ハクサンシャジンなどが、涼しげに咲いていて、暑い中で一服の清涼剤でした。

頂上10 時50 分。今野昌雄秋田支部長が抹茶をたててくださり、粋な計らいに感激しました。11 時半下山開始。ゴンドラ前に12 時半。秋田の自然を満喫した2日間でした。

たった一輪咲いていたニッコウキスゲ

本 BooKs

日本で100年、生きてきて

むのたけじ著　聞きて・木瀬公二
朝日新書　780円

今年８月に101歳で亡くなったむのたけじさんの遺言のような著書です。戦争絶滅を訴え続けた生涯でした。

本書は朝日新聞記者の木瀬公二さんが、2009年から聞き書きした150編から86編を選んだのが本書です。2015年5月発行。

むのさんは、終戦と同時に、戦争を止められなかった自責の念から朝日新聞を辞めて故郷秋田で週刊新聞「たいまつ」を創刊し、一貫して反戦、反原発を貫きました。「たいまつ」は30年続けられました。

むのさんは「貧乏に追われたけどそれが私の一生の中に筋金を通してくれた。続けることがエネルギーを生んだ」と語っています。

「地球は小さなものが住むのに合うんだ。威張るもの、乱暴なものは嫌いなんだ。小さくて弱いもの、軽くて低いもの、少なくて細いものなどを大切にしなくちゃ。そうすれば人間優しくなるんじゃない。花が傷つけずに咲きあう『共生』という感覚も大切にして」です。私はむのさんのこの言葉が好きです。本書の中で一番心に響きました。

戦時中に、むのさんは３歳の長女を疫痢で亡くしました。医者に診せてやれなかった悔いをずっと持ち続けたとも書いています。弱い人の立場をわかる人は戦争はしないと思います。平易な文章でありながら、自分の人生に裏打ちされた骨太の発言に励まされました。

戦争を廃絶して人間主義を提言したむのさんのどの言葉も含蓄があり、生きる糧にしたいと思いました。むのさんの言う人間主義とは、「無限の発展はいらない。当たり前の平凡な腹八分目で我慢する生き方が必要なんです。地球の環境を大事にするとか、スローペースの生き方とかですよ」と語っています。

時代の正体vol２
語ることをあきらめない

神奈川新聞「時代の正体」取材班
現代思潮新社　　1600円

戦争法強行採決以降、直近までの状況を取り上げた神奈川新聞連載の「時代の正体」をまとめた本です。

改憲、日本会議、報道統制、ヘイトスピーチなどに研究者や作家、ジャーナリストが警鐘を鳴らしています。

ジャーナリストの金平茂紀さんは、「もう一度ジャーナリズムの精神を」と訴えます。

2015年の「沖縄慰霊の日」の現場にいた金平さんは安倍首相に対する沖縄県民が「帰れ！帰れ！何しに来たんだ」の怒りの叫びを聞きました。ホテルに帰ってからNHKニュースを見て言葉を失ったと言います。すべてのやじがカットされていたと。政治権力を恐れた萎縮が進んでいる。権力の監視は報道の役割であることを訴えています。

川崎のヘイトスピーチから、安倍晋三首相がビデオメッセージを寄せた「今こそ憲法改正を！　一万人大会」まで、今般の不穏を追い、偏向報道だという批判に「ええ、偏っていますが、何か」と応じた取材班。「ジャーナリズムの役割とは、突き詰めれば、戦争を食い止めることだ」と明言しています。でもそんな当たり前の言葉があまり聞かれないと思いませんか？

堂々と、自分の言葉で語ってくれたのがシールズでした。「絶望は声を上げなくなったときにやってくるのであるなら、語り続けることだけが希望の未来を連れてくる」。私もそんな一人でありたいと思います。

空気は読まないと公言する一地方紙の面目躍如たる一冊です。

漂流

角幡唯介著　新潮社
1900円

1994年冬、沖縄県伊良部島・佐良浜のマグロ漁師、本村実さんは、フィリピン人らと共に救命筏で37日間の漂流の後、「奇跡の生還」を遂げます。しかし８年後、本村さんは再び出航し二度と戻ることはありませんでした。九死に一生を得たにも関わらず、彼を再び海に向かわせたものは何だったのか？

沖縄の池間島や伊良部島、宮古島につながる佐良浜、グアム、パラオ、フィリピンなどで家族や関係者の話を聞き、漁師の生き様を追った渾身の長編ノンフィクションです。

佐良浜の郷土史、そして本村さんの個人史に角幡さんが旅した時間軸、その３本がより合わさった構成で、これも一種の探検物ではないかと思いました。

かつてマグロやカツオの遠洋漁業で栄えた佐良浜で、死と隣り合わせで生きてきた海洋民の独特の死生観があることに角幡さんは気が付きます。

死を賭して得た稼ぎを、とことん飲み、ギャンブルにつぎ込む姿が浮かび上がってきます。

佐良浜という土地が本村さんの生き方を決定したようです。角幡さん自身が家族を持っても探検に向かっていくのと、どこか重ねているのが伝わります。

五感に訴えかけてくる文章も素晴らしい。

振り返れば私が、そして父がいる

立松和平・横松心平著
随想舎　1800円

単行本73冊を収録した全31巻の小説全集「立松和平全小説」の巻末エッセーを、立松和平さんが書いていましたが和平さんが2010年に急死したため、１０巻以降、息子の心平さんが引き継いできたエッセーを１冊にまとめたのが本書です。

心平さんとは泊原発の廃炉をめざす会の活動を通して知り合いました。夫婦で６人の子育てをしながら、父、和平さんと同じ道を歩んでいます。

300冊もの著書を残した立松和平さん。心平さんは休むことなく、走り続けた父の人生を振り返ります。

世界中を飛び回って、書いているとき以外は不在がちで、かまってもらえなかったという思いが強かった心平さん。有名人を親に持って、嫌な思いもたくさんしたことは容易に察しがつきます。青春期は父とは距離を置いた存在だったのに、この本を書きながら父との距離を縮めていくのがいいです。思えば似たところがある親子です。

父の文学以外の仲間が、心平さんにつながっていくのも、和平さんが作った信頼関係があればこそでしょう。

和平さんは、足尾に緑を育てる会に力を注いでいました。この映像は私も見たことがあります。父の死後、「足尾に緑を育てる会」の活動を会の仲間と心平さんが引き継いでいます。カバー写真は荒廃した足尾の山に緑を取り戻そうと植樹する人たちの姿です。母方の曽祖父が足尾鉱山で働いていたのです。足尾鉱毒事件で、川や森、畑も死に果てた地に和平さんには特別な思いがありました。

和平さんが亡くなった年の４月の植樹デーに心平さんは行くのです。「そこここに父の気配を感じ、涙がにじんできた」と記していて、やっぱり親子だなと、思わず涙ぐみました。

心平さんの真骨頂は本書の巻末にある、立松和平の小説ブックガイドです。和平さんの本を客観的、かつ的確に評しています。「毒 - 風聞・田中正造」を是非読みたいです。

茜色の街角
北嶋節子小説集

北嶋節子著
コールサック社
1500円

いじめ、友情、恋愛、家族関係。少年少女の心の闇と成長の物語が、野宿者（ホームレス）支援問題にリンク。生きることのせつなさ、現代社会の深淵でつながるものに希望のありかを探る意欲作７篇（帯文）です。

北嶋節子さんは小学校教師を37年間勤務されました。あとがきに「担任した子どもたちの貧困やそこから生まれる差別、いじめの問題なども、この野宿者問題と深く、関連しあっていました。一人でも多くの方に知ってもらいたい、格差のない、みんなが明るく暮らせる社会の実現のために、力を尽くしている生活自立支援センターや市民ボランティアグループの方々の取り組みを伝えたい、そして、そこに生きる人々の姿を書きたいと考えました」とあります。

本書の中で、優等生とされる少年がいじめに加担し、やっていない少年になすり付け、教師までもが真実をみていない場面が辛かったです。いじめられた子は、学校には行けません。でも貧困や差別で辛い思いを抱えている人たちのことを知ることで、子どもたちの視野を大きく広げます。私にとっては思いがけない世界でした。

学校現場も締め付けが厳しくなって、教師に余裕がないように思います。夫も授業を大事にして、毎晩、実験などで考えさせる授業に工夫していました。ただ、本書に描かれるように外の世界につながれない現状も知ってほしいと思います。

少年少女が、生活支援グループのボランティアをすることで、自分の居場所を見つけて個性を生かした進路を選び自立していく姿が清々しく、希望を見ました。

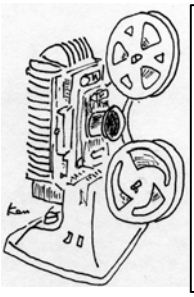
「少女像」に込められた思いを聞きました

８月22日（月）シンポジウム「東アジアの記憶と共同の未来」に参加しました。会場は札幌の西本願寺です。

ソウルの日本大使館前に立つ、慰安婦を象徴する「少女像」作者のキム・ソギョンさんとキム・ウンソンさん夫妻（写真）のお話を聞きました。

お二人は「少女像」には当時慰安婦にされた悲しみや苦しさを表している。踵がすり切れたはだしは、険しかった人生を表し、地面を踏めず少し浮いた踵は、彼女たちを放置した韓国政府の無責任さ、韓国社会の偏見を問うていると語りました。少女の髪の毛は単におかっぱではありません。あえて乱暴にむしり取られた短い髪なのです。ギザギザの毛先は、家族や故郷から無理矢理引き離されたことを意味しています。改めて「少女像」に込められた思いに感動しました。

この「少女像」を女子大学生たちが交代でテントに泊まり守っています。とても心にしみました。

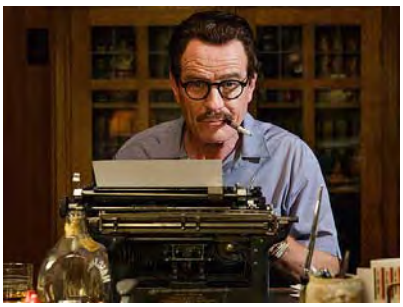


人間としての尊厳を守るために
闘い抜いた不屈の精神

『トランボ
ハリウッドに最も嫌われた男』

樋口 みな子

名作『ローマの休日』や『黒い牡牛』を送り出した、本当の脚本家ダルトン・トランボを知っていますか？私は全く知りませんでした。これらの作品はアカデミー賞を受賞していますが、トランボの名前が表に出ることはありませんでした。特に『ローマの休日』は私も大好きな作品で、オードリー・ヘップバーンの大ファンになりました。偽名で発表した作品だったため、トランボの名前は長い間　葬られていたのです。



ダルトン・トランボはハリウッド黄金期に第一線で活躍していましたが、1940年代後半から50年代に猛威を振るったハリウッドの〈赤狩り〉の標的となり、下院非米活動委員会への協力を拒んだために投獄されてしまいます。稀代の脚本家トランボの苦難と復活の軌跡を映画化したのが本作です。

トランボは反共、赤狩りという政治的偏見による暴力で、言論の自由も人間としての尊厳も奪われます。トランボら、「ハリウッド・テン」と言われた人々は仕事も奪われ、収入も失います。監獄で裸にされる屈辱。しかしトランボは看守を見据えます。そこには、自由を奪う者への強い怒りが込められていました。

釈放されると、妻クレオと3人の子どもは父を信じ、耐え、トランボを支え続けます。トランボは家族の生活を支えるためにB級映画の脚本を寝る間も惜しんで書き続けます。映画は不屈の脚本家の生涯を多彩なエピソードを交えながら浮き彫りにしています。映画には描かれていませんでしたが、トランボの評伝を読むと、子どもたちは地域で孤立し、学校では無視され続けました。

赤狩りの嵐は吹き荒れ、女性映画コラムニストは先頭にたって反共のコラムを書きます。密告が日常化して映画関係者の300人以上が失職するのです。トランボはそんな仲間の生活も支えます。逆境にくじけず不屈の精神で、素晴らしい作品を世に送り出したことをこの映画で初めて知り、感動で胸がいっぱいになりました。

妻クレオの聡明さも心に深く残りました。本名を取り戻すまでの十数年の闘いを支えます。父の生き方を理解し、黒人の公民権運動に参加する娘が頼もしい。ラスト、トランボのスピーチも素晴らしかったです。ヒロイズムや被害者意識はみじんもなく、ハリウッド映画の過去の歴史を冷静に捉えなおしています。日本はこういう負の歴史に向き合っているだろうか？とアメリカにはまだ民主主義が生きていると感銘を受けました。

先日、そのトランボが原作・脚本、初監督した『ジョニーは戦場へ行った』をテレビで観ました。日本では1973年に公開。

ジョーは第一次大戦でヨーロッパに参戦。両手足、眼、耳、口を奪われます。しかしジョーには鮮明な意識があり、首や胴体を動かすことは可能でした。また皮膚感覚で周囲の振動を察知し、人の動きを掴むことができました。

そんなある日、看護師が部屋の窓を開け、ジョーは太陽を感じます。ジョーの生きる喜びが伝わってくる場面です。ジョーは少年時代の記憶を振り返りながら、戦場での悪夢のような体験を思い起こします。気付いた看護師は、軍医たちを部屋に呼びます。ジョーは必死に頭を打ち付けて、「助けて！」「外に出してくれ！」とモールス信号を送り続けます。ジョーのあまりに残酷な現実とかつての夢の違いをきわ立たせるように、病室の場面はモノクロで、過去を思い出す場面はカラーで表現しています。

ジョーの恋人が「戦場に行かないで！私がなんとしてでも匿うわ」と懇願するシーン。ベトナム戦争の時に、ベ兵連が日本でも兵士をかくまったことを思い出しました。トランボ監督の渾身の反戦映画です。

安倍政権でメディアに対する圧力が増し、報道現場の萎縮が顕著です。しかし、政権に屈していていいわけがありません。メディアの役割は反権力であるはずです。伝えるべきことは堂々と報じてほしい。特にテレビは映像と音声で真実を伝えることができるはずです。良い報道は市民が応援します。この映画を観て、平和で自由に語ることの大切さを改めて知り、勇気がわきました。お勧めの映画です。（札幌映画サークル会報シネアスト10月号に寄稿）

著書「トランボ　ハリウッドに最も嫌われた男」ブルース・クック著と「ダルトン・トランボ　ハリウッドのブラックリストに挙げられた男」ジェニファー・ワーナー著も映画を理解するのに役立ちました。

ニュースの真相

ジェームズ・バンダービルト監督

ブッシュ米大統領が再選を目指していた2004年、米国最大のネットワークＣＢＳの女性プロデューサーメアリー・メイプス（ケイト・ブランシェット）は、著名ジャーナリストのダン・ラザー（ロバート・レッドフォード）がアンカーマンを務める看板番組で、ブッシュの軍歴詐欺疑惑をスクープします。

しかし、その「決定的証拠」を保守派勢力に「偽造」と断定されたことから事態は一転。メアリーやダンら番組スタッフは、政権と世間から猛烈な批判を浴び、メアリーは退職、ダンは降板します。ニュース番組の裏側からアメリカ社会とメディア産業の内実を描いた実話です。原題は「ＴＲＵＴＨ」、真実です。

ブッシュの再選の行方を左右しかねないスクープに、政権側はネットを利用して、文書は偽造だという情報を拡散させます。メアリーには、バッシングのメールが殺到します。激しい非難にさらされながら、それでも矜持と信念を失わずに、圧倒的に不利な闘いに挑むメアリーやダンらの取材チームに心揺さぶられました。メアリーの「真実だから報道するのよ」という力強い言葉が、ジャーナリスト魂を見せつけて爽快です。

「真実」をつかまれたときの権力の反応の素早さは日本も同じです。組織を守ろうとする上層部と真実を追求する制作現場の対立も描かれます。今日本でも同様のことが起きていて、とてもタイムリーな作品です。最近のメディアの萎縮ぶりは安倍政権下で「報道の自由度」が世界７２位になったことが如実に物語っています。市民の目線で報道し続けてきたキャスターやジャーナリストが「偏向」を理由に放送界から追放されたことを許してはならないと思います。

植村さんの真実を訴える闘いを孤立させてはならない、と強く思いました。「植村裁判を支える市民の会」をたくさんの人に知ってもらいたい。

奇跡の教室 受け継ぐ者たちへ

マリーカスティーユ・マンションシャール監督

パリ郊外、貧困層が暮らすレオン・ブルム高校。さまざまな人種の生徒たちが集まる落ちこぼれクラスに、厳格な歴史教師アンヌ・ゲゲンが赴任します。アンヌは情熱的な授業をしますが、生徒たちはバラバラで反目し合います。

文化も宗教も違う生徒たちに全国歴史コンクールに参加するように促しますが「アウシュヴィッツ」という難しいテーマに彼らは反発します。

ある日、授業で強制収容所を生き延びたユダヤ人の、レオン・ズィゲルさんの体験談を聞きます。

レオンさんは「ナチスに肉親を奪われ、やり場のない怒りを持って生きてきた。収容所では絶対に生きて帰る！と強い気持ちで耐え抜いた」と語るシーン。生徒たちが真摯に受け止めるシーンがいい。

この日から彼らは変わり始めるのです。多様な文化の違いを受け入れられずにいた生徒たちが、アウシュヴィッツに向き合い、資料を調べ、ショア記念館を訪ね、ホロコーストの実態を知っていきます。コンクールでは見事に最優秀賞に輝きます。

教育が子どもたちの可能性を引き出し、いかに人間を変え成長させるかを生き生きと伝えて感動しました。

フランスは議論の国と言われますが、過去の歴史をどうやって次の世代に伝えるかは、日本も大きな課題だと思います。高校時代、私もこんな授業を受けたかったなあと正直思いました。

生徒の一人を演じたアハメッド・ドゥラメは高校時代のコンクールで優勝した体験をもとに監督と共同して脚本を書きました。

紙面がいっぱいで紹介できなかった映画「裸足の季節」「ストリート・オーケストラ」「ミモザの島に消えた母」「めぐりあう日」「シング・ストリート」も印象に残りました。

お知らせ

口頭弁論のチラシは同封します。

「銀河通信」の発行に毎回、印刷費が約25000円、郵送費に約15000円かかります。年間24万円になります。印刷読者には６号分1000円を頂いていますが、今年１月から９月末まででカンパも含めて、現在133000円です。10万の赤字です。印刷読者とWeb読者にもカンパのご協力をいただけないでしょうか？よろしくお願いします。
郵便振替「銀河通信」02740-7-56535
又は樋口みな子　19000 33109571

購読料とカンパをありがとうございます（敬称略）8.1～9.12

福田光子（秋田市）カンパも　福原正和（札幌市）カンパも　成田明（札幌市）カンパ　菅邦子（三鷹市）カンパも　六百田麗子（福岡市）　三島春光（東川町）　石井一弘（札幌市）著書　北嶋節子（横浜市）著書　横松心平（札幌市）著書　崔善愛（東京都）ブックレット

計18000円は印刷と送料に使わせていただきます。著書もありがとうございました。